

誌上行学講習会

高佐日焯上人

「二、此の四つの慾望を成就することゝ万人共通の願いである。仏教では是を四徳波羅密と言ひ訳して到於彼岸と云う。理想の成就せらるる所の意味である。」
波羅密が京都に住んでいたところを六ハラと言いた時、代表者が理想の場所という風を六ハラと言いたとき、実際に最高波羅密の場所をハラミツタとも申され、毎春あります。波羅密をハラミツタとも申され、毎春と秋に彼岸という仏行事があります。彼岸というのすから彼岸という仏行事が悩みます。彼岸というのらかなる彼岸へという意味で、到於彼岸、彼岸に至ると申すのであります。

今日彼岸というところは、お彼岸とは精神修養をする日な实际的ところ、遠く聖武天皇のときその制度もうけたのであります。が、その当時の日本は貴族と農奴しかいなかったので、大地主と権力をもっている人、それから使われていた人、しかも後者が大部分だっただけで、聖武天皇は働いている農奴に大変同情を感じたので、一年の中春秋の七日間、その農奴の為に休養を与え、絶對にその期間は働かせるなという国をあげて認め、るよう、その法令を出されたの期間はお寺へ行かしためだ、休めたい、その何で僧侶の話聞き、お精神修養を先祖様に感謝し併せて僧侶の話を聞き、お精神修養をするように、制度化されたのであります。お精神修養をの事であり、現実の苦しみから解放され、静かには人かな休養を得る。我を止まらめれた御先祖様を忍び、修養の固日であるべきかを僧侶の指導で学び、その形がけとなり、かろうじてお墓まいりだけが続けられる精神よゆうであります。

「1 常波羅密……常住不滅の生命の在る所
2 樂波羅密……無苦安樂の生活の在る所
3 我波羅密……我意自在の活動の在る所
4 淨波羅密……清淨平安の樂土の在る所」

徳波羅密を成就する為に生きていくわけなのであります。人間はこの彼岸にたどりつくためには此の彼岸、即ち四徳波羅密の世界に達することが出来るかを表示されたのが、大乘仏教の菩薩という思想であります。それとそれを最も解りやすく説明しているのが本講習会なのであります。

「三、是等の事實は現実の世界には無い。」
「實際ありませんね。死なない人は無いし、さてあの人は樂をしてるかと思うが、聞いてみるとどうもそうではない。」「金」があっても何かで苦勞をしている。地位があっても悩んでいる。これが現実の姿のようでありますね。」

以下次号に続く

然しそれは自然の儘に於ては無いと言ふことであつて、人類の文化は一步々理想の彼岸に向つて前進を続けています。これは文化という名のもとに理想に向つて進んでいることだけは事実のようであります。